「利益相反」を考える

現役のころに、研究不正防止「研修会」なるものが開催された。出席チェックされたこともあり、とにかく真面目に参加して、研究倫理についての「研修」を再三にわたり聞いた。そのときのキーワードのひとつが「利益相反」である。辞書によると、「利益相反」とは、当事者の一方の利益が、他方の不利益になる行為などと説明されている。

写真は『文芸春秋』2014 年 11 月号掲載の竹中平蔵氏(以下、敬称略)などをめぐる森功レポートである。竹中については私のレポートでも、都留重人『21 世紀日本への期待』で厳しく批判されていることを紹介した（2014 年 10 月 28 日）。森レポートを再読し、都留先生の竹中批判の意味を再確認でき、「利益相反」なるものを考えさせられた。

東京港区元麻布にある、ASKA 事件で脚光を浴びた「仁風林」の琴のコンサートから話は始まる。この仁風林は人材派遣大手「パソナグループ」の迎賓館である。パソナ代表の南部靖之は、政官業の人脈の幅広さと親密度から、政商とまで呼ばれる。安倍政権では、菅官房長官や下村文科大臣などが、仁風林の参加メンバーという。産業競争力会議の民間議員である竹中は、パソナの会長として、この宴に駆り出された。

パソナは経営難に陥るが、その再建には 1999 年 12 月の改正労働者派遣法の施行が大きく貢献した。そして 5 年後の 2004 年 3 月、小泉政権は労働の自由化に向けて舵を切った。労働の自由化を実現した「小泉規制緩和」で采を振るったのが、民間から抜擢された竹中である。パソナの売り上げが急増するなかで、竹中はパソナの特別顧問に就任する。まさに規制緩和の恩恵にあずかった対象企業がその恩を返した格好に映る。竹中は 2009 年 8 月、あらためて 07 年に新設されたホールディングカンパニーのパソナグループ会長の椅子に座る。産業競争力会議の民間議員と人材ビジネス会社の会長という二つの顔をもち、我田引水批判がともなう竹中は、学者として政府の審議会に携わっていると強弁してきた。竹中が産業競争力会議で熱心に取り組んできたのが、政府の「労働移動支援助成金」の増額だ。パソナはこの再就職支援事業を得意とする。パソナ会長である竹中は、仁風林という迎賓館では官僚や政治家をもてなす立場だ。企業接待が事業の見返りを期待しているのは自明。そういうほかない。

ここまで森レポートを抜き書きしてきて、「利益相反」とは違ったアベノミクスに隠された問題が見えてきた。

（2015年1月6日）